校長室だより～燦燦～ №５５６

監督

2022.5.24

菊池雄星、大谷翔平、佐々木朗希とくれば、プロ野球選手である。それも並の選手ではない。菊池選手は、現役メジャーリーガーであり、大谷選手に関しては紹介するまでもない。その活躍に日本だけでなく、アメリカ中が熱狂している。プロ３年目を迎えた佐々木選手の活躍も並外れている。

この３人が、いずれも岩手県出身というのは、どういうことなのであろう。わずかの期間にスーパースターが３人も出ている。大谷選手と佐々木選手に至っては、何十年に一人、いや二度と出ないかもしれない逸材であろう。

この３人の活躍の陰には、２人の監督の存在がある。花巻東高校野球部の佐々木洋監督と大船渡高校の國保陽平監督である。

花巻東高校に大谷選手が入部してきたときは、「先輩の雄星さんみたいになりたい」と言っていた。すると、佐々木監督は、夢というのは掲げたところより少し下で実現するような感覚があるため、「それでは菊池以下になってしまう。菊池を越えると言え」と指導している。

当時、菊池選手の投げる球は１５５キロくらいは出ていた。佐々木監督は、大谷選手に絶対に１６０キロ出せると暗示をかけている。実際に目標を書くときに、１６０キロと書いたら１５８キロになってしまうと心配していたそうである。ところが、大谷選手は、もう目標の立て方を心得ていて、１６３キロと書いたそうである。

佐々木監督は、菊池選手も大谷選手も、入部してきたときから間違いなくプロに行ける選手だと感じていた。そんな逸材が名もない自分の所に来てくれたわけだから、生半可な指導をするわけにはいかないと考えた。自分自身にプレッシャーをかけるために、ドラフト１位で送り出せなければ監督を辞めると宣言している。さらには、それを確実にするために、その上のメジャーへ送り出すという目標を掲げて二人と共有している。

一方、大船渡高校の國保監督は、甲子園出場をかけた岩手県大会決勝の舞台で、佐々木選手に投げさせないという選択をしている。これは、当時、賛否両論の大きな騒ぎとなった。國保監督はだいぶ叩かれたはずである。対戦した相手が花巻東高校というのも因縁めいている。

プロ３年目を迎えた佐々木選手が最年少で完全試合を達成し、次から次へと三振の山を築く姿を見て、國保監督は何を思ったのだろうか。やはりあのときの判断は正しかったと思ったのだろうか。それともほっと胸をなでおろしたのだろうか。

菊池選手と大谷選手は、今では二人とも海を渡っている。彼らはたまたま海を渡ったのではなく、高校のときに自ら思い描き、自らの脚で海を渡ったと佐々木監督は述懐している。逸材やスーパースターには、類まれな監督の存在がある。